

谷文晁筆「公余探勝図」の制作について

中村 真菜美（大阪大学）

谷文晁筆「公余探勝図」（東京国立博物館蔵、全二巻七十九図）は、寛政五年（一七九三）老中・松平定信の伊豆・相模における巡見を契機に制作された。先行研究では、陰影法、遠近法やモチーフに西洋絵画の影響が指摘され、その迫真的な風景表現ゆえ、海防に関わる地理の把握を制作目的に挙げる見解のほか、同時代の文芸、絵画における風景趣味の一環とする説も提示された。さらに近年紹介された野村文紹筆「武相豆勝概図」（国会図書館蔵・以下、文紹本）など、本作の模本類には下絵の模本も含まれ、制作過程を考える上で重要である。

本発表では「公余探勝図」の制作に際し、文晁が蘭書の挿絵を学習した可能性を検討する。また、画中のモチーフから本作が巡見における定信の体験を表現していることを指摘する。

まず、本作の複雑な形状の雲や波、ハッチングを思わせる陰影、海上から陸地を捉える構図等の造形表現は、先学によって様式的源泉とされてきた秋田蘭画や司馬江漢の作品には認められない。文晁は、蘭書の挿絵を模写した北山寒巖や石川大浪等との交流が知られているが、さらに、蘭学者も集った躋寿館（後に医学館）とも関係したことが文晁自筆の縮図帖「畫學齋過眼藁」（大東急文庫蔵）から判明した。文晁が蘭学グループと接点を持ち最先端の情報を入手できる環境にいたことが確認できる。定信もまた蘭書蒐集を盛んに行い、本作に西洋由来の表現技法を用いることは定信の要望であったと考えられる。以上の知見を踏まえ、舶載蘭書のなかでも、ヨハン・ニューホフ著『東西海陸紀行』や『オランダ東インド会社派遣使節中国紀行』などの旅行記の銅版挿絵と本作との類似点を挙げることで、文晁が蘭書に学んだ可能性を示したい。また、本作を「中清書」の模本と伝わる文紹本と比較し、文晁が蘭書から学んだ技法を画中に応用していく過程を明らかにする。

次に、本作は景観描写に対し、人物表現はあまり注目されてこなかった。しかし、全七十九図中、五十三図に点景ながら人物が描かれ、海岸で探索する姿や奇勝を眺める姿など、その行動が克明に描きこまれている。日々の天候は「西遊画紀行」（板橋区立美術館蔵）でも描写され、文晁が旅の様子を描く際に用いた重要なモチーフであったが、本作の天候も巡見期間中の実際の天候と一致することが文献から明らかである。加えて、巡見中に遊行寺から眺めた富士を描く「藤澤寺境内望富士」（第五図）中の「清音亭」は、定信命名の茶室であることが『藤澤寺日鑑』に確認される。また、清書までの過程を辿ることでモチーフの取捨選択が指摘でき、旅の情景を印象的に伝えるための改変が行われている。細部の検討から、本作はその制作に際して、依頼者である定信個人の巡見体験を記録することが重視され、定信の記憶と関わる「旅日記」としての側面を有すると結論づける。